

界の動向に対してのことである。

十年といえは、昔、その間の活躍を回顧する時、古代学協会の創立十周年を心よりお祝いとすると共に、今後ともますます古代史学界のために貢献されることを願う。この協会のとって記念すべき『桓武朝の諸問題』の燕雜な紹介の筆をおきたいとおもう。

尚、本書は『古代学』とは別に別刷として出版されていることを附記しておく。

(B5二四三頁、昭和三十七年六月古代学協会刊)

(佐藤宗諒)

L. Mumford: The City in History

Its Origins, Its Transformations, and Its Prospects. 1961

老学者マンフォードは文明批判家なのであろうか。一見したところで『西洋の没落を書いたドイツのシュベングレーにも通じる感じがある。が彼は哲学や社会思想家ではない。その題名の如く歴史の中に都市生活や文明の発展を考えるとするものである。もともと建

築畑に育った前ベンシルヴァニア大学の都市計画の教授であった人。従って例え文明の変遷を論じてもシュベングレーの書物とは異って、本書中には具体的な都市文明の記述や豊富な挿図写真がぎっしり入れられている。だが彼の書物を読みこなせるエンジニヤーは日本には少いところに本書紹介の価値があると思う。彼の思想はもともとスコットランドの都市計画家であり、生物学者であったパトリックゲッツに影響されたと述べているが、それにしても外国の都市計画家にはこのような市の広い学者のいることに感心させられる。日本の都市計画家といえは県庁の役人か、大学の研究室にあっても無味乾燥な数字の算出による机上の都市計画論が流行している昨今の印象とは大きな差がある。しかし私がかってローマ大学を訪ねた時、その文学部に古代都市計画研究室が設置されていたことや、マンフォードの前著たる『The Culture of City, 1938』が日本の建築家によって早くも紹介されたことを一方には心強く思ったことは事実である。

本書は同じ著者によるこの『都市の文化』の姉妹編をなすもので、どちらかといえは、

前著よりも標題の如く都市の歴史の記述の価値が多いのを特色とする。A5版、六五七ページの大冊版中の結論では過去及び現在、未来の都市文明や都市生活の共通点と差異を見出さんとするのである。あらゆる時代の都市を通じて共通するものはあるが、古代都市において存した為政者の抑圧的条件は、階級差のなくなった現在では存在しないこと、都市は仕事や政治の場であるよりも新しい human personality すなわち、One World Man、としての市民の息吹きを発見する場所だと考えんとするのである。そして戦争は都市の破かい者であることを述べる点に親しまれる。章を分つこと一八。いまその各章の標題のみを示すと次のごとくである。一 聖所・村落・要塞、二 都市の結晶、三 祖先の様式と型、四 古代都市の性格、五 都市国家の出現、六 理想都市をめざす市民、七 ヘレニズムの絶対主義と都市性、八 メガロポリスからネクロポリスへ、九 僧院と社会一〇 中世的都市生活の家計、一一 中世の分裂・現代への曙光、一二 バロック様式の構造、一三 宮廷・練兵場と首都、一四 商

業の拡張と地方都市の解体、一五 旧技術期における楽園 Coketown、一六 郊外とその外方、一七 メガロポリスの神秘、一八 回顧と展望、付文献、付記。

いずれの章も題目だけをみたのでは内容までわからないが、要するに人類の都市の生活の発展を先史時代以後最近世に到るまで技術と社会の進化を通してのべたもので、例えば一五の paleotechnic とは近代技術の黎明期の意、Coketown とは直訳すればコークスの町で、産業革命期はじめの近代都市生活の一端を述べたものである。これに対して一章は人口の都市集中の反動としておこる分散と近代的郊外利用の方向を、The Suburban Way of Life、としてゐる。結局彼の場合もまた手足のごとくびる現代都市の巨大化をおそれるのである。が、前著を書いた第二次大戦前に較べると墓場、すなわちネクロポリスと名付けた行きづまった様相は戦後には幾分変化した郊外への拡張やニュータウンの成立をみたことを述べる。にもかかわらず今日なお思想的な、或は一方には化学的な毒物がメトロポールにはみちており、個々の分散独立した人間性や都市施設の融合が必要で

あるとする。

前書と同様本文は難解でくせのある文章で抽象的につづられているが六四葉にのぼる都市の写真はいずれも各時代の都市生活を代表するものがおさめられ、その一々について解説が行われ、これのみで既に数千年に及ぶ世界の都市発達史を知ることが出来る。しかもそれが考古学者や歴史家等が特別に注意する古代や中世に関するものだけにとどまらず近代から現代に到る工場や住宅団地、さてはオートバーンに到るまで各時代のものが収録されている。その説明たるや例えば煙をばくばくンチエスターの町を、Industrial Coketown、と呼び、ワシントン市街の直交放射状街路を説明するのに、"Belated Baroque," とか、ニューヨークのスカイスクレイパーの鳥瞰を、"Standardized Chaos," 等と皮肉るところに老学者らしい過去と未来を洞察する広さがある。もとより資料の新しい学術書ではない、どちらかといえは啓蒙的教養の書というべきものであろうが、巻末に収録された参考文献中には我々の考え及ばないあらゆる種類の都市の歴史、政治、社会、建築、都市計画の論文が収録されているのが後学者の研究に

役立つ。ただ一つ参考文献中には、地理学者による都市の論文が少いことで、これは本文中都市計画図や地図の挿入がみられないことともに評者にはやや物足りなさを感じるのである。

(London Seckner & Warburg 社発行、日本貨四、二〇〇円) (藤岡謙二郎)